北上市立 鬼の館だより

第27号

七夕ワークショップにて

～敬老の日～　お年寄りご招待

9月17日（月）の敬老の日を前に、市内の老人ホームやデイサービスに通う各施設のお年寄りを毎日ご招待しました。施設の職員の方々に優しく介護されながら当館の学芸員のお話に耳を傾けていらっしゃいました。「車を自分で運転できるわけでもなく、こうして連れてきてもらえたから見ることができました、今度は家族も連れて来たい」とおっしゃっていた方、また、企画展「いわての権現さま」を見学中、ずらり勢ぞろいした権現さまに手を合せる姿には心が洗われる思いでした。長生きをしてまたどうぞいらしてください。

鬼の館07：上半期をふりかえって

特別展「眠りから醒めた文物展」4／28(土)～7／8(日)
～縄文時代から近世へ～

今回の開放事業では、北上市に勤務する高橋勉さんのコレクションの中から年代ものの刀剣・漆椀・阿弥陀如来座像などが公開されました。期間中は、愛着のこもった品々を高橋さんが来館者へ一つ一つ丁寧に説明する姿が印象的でした。

「眠りから醒めた文物展
～縄文時代から近世へ～」によせて

私達の周りの美しい山河。

父も母も、太古より祖先の人々も、この光景に心を潤していたであろうことに思いを馳せる。

太古よりこの風土の中でたくましく生き、子孫を育んできた祖先の生きてきた証しを、今、この古き物達が語っている。

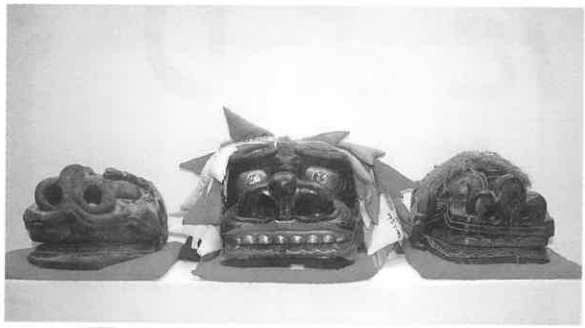
物は皆、土に還る。朽ちて、土に還る物にも生命が宿っている。人の慈しみを得、永遠に輝くこともある。工人は素材を自然の中に求めた。そのとき、その時代の人々は、祈りを形に変え、心血を注ぎ作品にした。奇跡にも、その生命に限りが無いのは当然である。

今、ここに私達の目の前にある物達は、常に身近にあって、永い間の眠りから覚めたもの、大切に親から子へと伝えられてきたもの、いろいろである。皆、誇らしげに「時代」の黒いベールをまとっているが、この世に生まれた時は、感動と希望を与えたに違い無い。

どうぞ、御高覧の上、先人達の良き伴侶、歴史の証人であるこの物達の晴姿に、今一度光を与えて戴きますよう。

奥州文庫　高橋　勉

企画展21「いわての権現さま」7／21(土)～9／23(日)
～崇められた権現さまたち～



岩手県地方では、いわゆる「権現信仰」が盛んです。もともと「権現」とは仏教用語で、如来や菩薩が人々を救うために仮の姿で現れること、現れたものをいい、火防せや厄除けのご利益があるとされています。この展示では、古くは14世紀前半の南北朝に奉納されて祀られたものから、各時代を経て現在民間祭祀や芸能で祀られているものまで、約50頭の権現さまが県内各地から大集合しました。地域性や信仰心、さらには時の流れとともに姿や形を変えながらも現在に受け継がれている「権現さまたち」をたっぷりご堪能いただけたのではないでしょうか。

大乗神楽大会　7／15（日）

今年は北上市内で神楽を継承する7保存会が集合し、ボランティアでの開催となりました。大乗神楽連絡協議会の主催で、「神おろし」から「神あげ」まで15演目が披露され雨の中足を運んだ観衆を大いに魅了しました。青少年芸能も交えて上演するなど、伝統芸能を受け継ぐ若い世代の活躍が目立ちました。

鬼学講座 ～パートXI ～葬送儀礼と生者の民俗～

毎回各分野から講師先生をお迎えし、様々な切り口から「死」を捉えた講義をしていただいています。8月の移動研修では秋田県羽後町の西馬音内盆踊りの研修へ出かけました。西馬音内盆踊りは、国の重要無形民俗文化財に指定され、全国的にも有数の踊りです。ゆるやかで流れるような動きに、しなやかな手振りと反り返る指先。参加者たちはその艶っぽく怪しげな世界にどっぷりと浸ったようです。その他日本三大地獄の一つ川原毛地獄を訪れるなど今年のテーマ「死後の世界」を体験的に探求しました。

こどもの日わくわくイベント

５月５日のこどもの日は小中学生見学無料。さらに妖怪風船やお面作りを体験してお土産にできる他、「鬼に変身」のコーナーでは鬼剣舞の衣装に着替えてカッコよくポーズを決めて写真をパチリ。今年は北上の大道芸サークル「ピエロの会」のメンバーをお招きして「南京玉すだれ」や「バナナのたたき売り」なども披露され集まったお客さんを喜ばせました。

ワークショップ

七夕や夏休みに「妖怪うちわ」や「モビール」作りなど親子で力を合わせて創作活動を楽しみました。エントランスホールに設置された笹竹には七夕の願い事をしたためた短冊が所狭しと結びつけられていました。こどもたちは将来の夢や今ほしいもの、お母さん方は「家族みんなが健康に暮らせますように」など家族の無事を願うものが多く見られました。

ボクら鬼っこ探検隊!!

８月１日（水）から３日（金）にかけて、わんぱく講座「鬼っこ合宿～ボクら鬼っこ探検隊ミステリーツアーinみちのく民俗村」を行いました。市内の小学校から27人のこどもたちが集まり、献立て作りに買い出し、ごはん作りや掃除、朝はラジオ体操など、それぞれの係分担で協力し合いながら２泊３日を過ごしました。創作活動では、個性豊かな焼き物の鬼が完成。また、展勝地に停泊している連携号の上で北上川と船にまつわるお話を聞いたり。夜のナイトォークではまっ暗な山道を歩き、ようやく辿りついた山頂からは宝石を散りばめたような北上市の夜景を望むことができました。そして萱葺きの民家に蚊帳を張って就寝。近頃では珍しい生活を体験したのではないでしょうか。

博物館実習

８月６日（月）～11日（土）までの６日間、博物館実習が行われました。博物館実習とは、博物館で働く専門職員「学芸員」の資格の取得を目指すもので、大学からの依頼で行われます。実習生は、巻物や面などを用いて資料の扱い方を学んだり、収集・保存・管理に伴う事務、また神社に出向いて石碑の拓本とりなど、短期間の間に多岐に渡る内容を熱心に学習しました。それではここで実習生の感想をご紹介します。

地域と共に生きる鬼の博物館

東北学院大学　文学部歴史学科　菊池徳法

『博物館の運営や意義、研究活動を理解してもらうためには、その地域の人々と密着した活動を積極的に行っていくことが重要である。』

これは8月の初旬にあった博物館実習で私の心に刻まれた考えです。これは特に博物館だけに当てはまるものではありませんが何かを経営していくために重要なのは利益以上に周辺地域に住むみなさんとの相互理解が必要だと考えさせられました。年に何度か行われているワークショップや鬼剣舞の講演などもその一環であり、そこに来られる来館者の方々の顔を見ると誰もがみな生き生きとした顔で活動の場に飛び込んでいるように感じられました。

実習期間中は、私がお邪魔していた事務室には様々な方が訪れました。その中には来館者の方はもちろん、鬼の研究のための資料を探しに来た方もいました。私も鬼剣舞に関する調査を個人的なレベルでですが行っており、鬼の館の職員の方々には大変よくしてもらいました。

団体での来館者には、学芸員の鈴木さんが自ら館の展示の解説をしに行く姿も何度かありました。解説をする鈴木さんの近くでその様子を見学していましたが、鈴木さんは館の展示で見てもらいたい場所、何を思ってこのような展示方法を取ったのかということを説明文の書かれたパネルを読む以上に、分かりやすく教えていました。その中で鈴木さんは『鬼は決して恐い者たちではありません。私たちを見守り、私たちと一緒に生きていく優しい存在でもあるのです。』といった旨の説明を来館者の方々に説明していました。私は精力的に活動する鈴木さんを見て、自分が目指している学芸員という職業に求められているものが何かということを理解できたような気がしました。

このように鬼の館では来館者の方や地域住民の方に館の運営方針を理解してもらう活動を積極的に行っています。そしてそれに応えるように訪れた方々もみな積極的に鬼の館のあり方を受け入れているように感じられました。

一週間という短い期間の中で多くのことを学ばせてもらいましたが、まだまだ覚えなければいけないことはたくさんあります。今はただそのきっかけと道を示してくれた館長の力丸光雄様、副館長の高橋勝様、主任学芸員の鈴木明美様、主事の高橋雅代様、専任研究員の貝塚亜佐子様、事務補助員の及川幸子様、前副館長の瀬川誠様、鬼の館の職員の皆様に心から感謝し、多くの激励の言葉と共に次の段階へ進めるよう精進していきます。本当に有難う御座いました。

新副館長ごあいさつ

〝地域に密着した施設の運営を目指して〟

副館長　高　橋　　勝

このたび４月１日の定期人事異動により前瀬川副館長の後任として着任いたしました。

この施設は皆様すでにご承知のとおり旧和賀町時代に、第４次和賀町総合開発計画の重点プロジェクトとして「鬼と平和の町づくり事業」が制定されたのを契機にふるさと創生事業を取り入れ広くアイデアを募集し「鬼の館」をシンボル施設として平成６年６月１日に鬼のテーマ博物館としてスタートしたものであります。

以来、平成16年度に10周年記念事業を行い今年度で13年目を迎え、入館者も50万人を達成しようとしております。

着任して６ケ月を過ぎようとしておりますが、地元でいながら今までゆっくり施設を拝観する機会が少なく、鬼についての知識もない私にとって重責を感じておりますが、素晴らしいスタッフに支えられながら毎日勉強の日々が続いており、同時に奥の深さを実感しております。

私に課せられた使命は、国内でもまれにないこの立派な施設を通じて「鬼とは何か」を、みちのく北上から日本全国へ、更には広く世界へ鬼情報を発信するのが、鬼の館の役割でもありその一役を担うのが私の責務と思っております。

そのためには、まず地域の方々の理解と協力が不可欠と考えます。

今、全国どの博物館でも共通した課題は、入館者が右肩下がりに歯止めがかからない状況での対応に苦慮していることではないでしょうか。

当館では、施設開放事業、特別展、企画展を始め年中通してさまざまなイベントを企画し入館増に努めておりますが、これからも市民が気軽に立ち寄れる施設として広く開放し地域と密着した運営をして参ります。

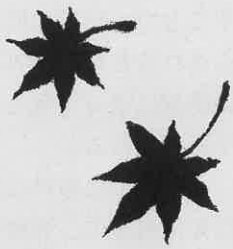
また、この地域は夏油高原温泉郷等、四季折々自然にも恵まれた観光拠点でもあり、一般市民から愛称を公募した「夏油高原いで湯ライン」の玄関口として重要な施設でもあります。そのためにはリピーター等にPRし地域温泉業者及び関係団体等とお互いに連携した取り組みが急務と考えており、それが滞在型観光にも繋がるものと考えております。

そのための一助として当鬼の館としても文化施設に固執せず観光と一体的な施設としての役割を果たしていかなければならないと思っております。

微力ながら常に前向きにチャレンジ精神を忘れず、誠心誠意皆さんと共に汗と知恵を出し職員一丸となって一生懸命頑張って参りますので、前瀬川副館長同様ご指導ご協力を賜りますようお願いいたします。

尚、鬼の館だよりが前期９月、後期３月と２回の発行なため私の就任挨拶が遅れましたことをお許し願います。

下半期のお知らせ



○特別展

「魔神・悪魔とされる鬼神たち」　10月６日（土）～12月２日（日）

「匠の伝承展」（開放事業②）12月15日（土）～平成20年2月17日（日）

「平成19年度収蔵資料展」平成20年2月24日（日）～4月13日（日）

○芸能公演　10月28日（日）御免町鬼剣舞

○鬼学講座

第５回　11月11日（日）「仏法から見る死の儀式・儀礼」妙見山黒石寺住職　藤波　洋香氏

○福豆鬼節分会　平成20年２月３日（日）

葬送と輪の儀礼

鬼の館　上席主任学芸員　鈴木　明美

1. 生と死の精神信仰

「死」は、万物“いきとし生けるもの”にとって避けて通ることのできない宿命とされている。特にも人類においては、過去から現在にいたるいつの時代においても、“生”に執着する願望は果てしなく、万国共通の永遠の命題として取り組まれ、古くは不老不死の妙薬とされるものへの研究開発、さらには自然界の中での妙薬の調達に奔走し試されるとともに、現代では近代医学の進歩によって延命治療や移植手術なども可能となり、日々医学に携わる者たちのもとで研究されて延命治療が施されている。

しかし、このような果てしない人命に対しての“生”への追及願望もむなしく、やがて必ず訪れる“死”は、経験のない生きる者にとって、現実的に直面する未知なる異界への恐れとなって増幅し、その恐れへの一筋の光明として、信仰心が生まれ、生きる人々の依りどころとして数々の精神信仰が派生し、そこには様々な儀式儀礼が執り行われている。それは、自己を含めた生きる者のための精神儀礼であったり、死者を弔うための供養儀礼でもあったりするが、その依代となる対象は神仏や冥界に君臨する王に向けられる場合が最も多く見受けられる。

人類はこの依代への精神的な信仰に没入することによって自己の“邪心”を浄化し、一方では仏陀が説く説法のひとつ“悟りと善への教化”を目指すことで、自己に暗示をかけ、死に対する恐怖から逃れるための精神習得にうち込むこととなる。この修練によって死という恐怖感からの脱却を希求するのである。

一方、現世における生への執着によって生まれた信仰に対して、死後への精神信仰もまた、生きる者にとって重要な命題であり、これらは死者の鎮魂と浄化をはかり冥福を祈るための精神的な儀式儀礼として派生し、数多くの儀礼が生きる者たちのもとで執り行われている。これらは、生きる者が死者を弔うための儀礼であり、入棺・もがり・弔い・戒名・野辺送り・お悔やみ・墓・仏壇・各種法要・法会・法事・追善・春秋彼岸・盆行事など死者に対する生者の多種多様の儀式儀礼があり、各々の儀礼は細部にわたってそれぞれの儀礼の意味付けがなされて死者の鎮魂・供養儀礼として民間に一般化されて定着している。

「生と死」の精神信仰は、この現世に生きる者にとって“生への執着心”と“死後の浄土感”の両輪が一体となることで、未知なる異界への恐怖感から脱却するための死生観としての精神信仰であり、その背景となるものに各宗教があり、個々の根本にある深層心理としてしまい込まれている死生理念と融合した形態が、現在の儀式儀礼として確立された姿であると考える。

2. 葬送にみる輪の儀礼

形態化された一連の死者に対する葬送儀礼も組みする宗教及び宗派によって、その儀式儀礼も画一化されたものではないが、一般的に組みするお寺の法儀にそって供養儀式が行われているようである。この一連の葬送儀礼の中で、特にも特徴的な儀礼として“輪の儀礼”が行われ目にする機会がある。この“輪の儀礼”は、屋外儀礼が一般的であり、その場所は葬礼が執り行われる会場の屋外となる。個人宅での葬礼では、家の前庭及び玄関前がその場となり、さらにお寺での葬礼では寺領境内、いわゆる祭場となる本殿の前庭で行われるのが通例とされるようである。

“輪の儀礼”は、屋内での僧侶による一連の法要儀式が終了した時点で行われるもので、お墓へ

の納骨儀礼を行う過程の前段儀礼として行われる。一般に死者との縁故関係にある者たちによって組織され、遺影や遺骨さらには供物や旗を携えた遺族と近親者が本殿の正面から出て庭に並び、一本の長い白布で連結して（白布のない場合もある）ゆっくりした歩調で輪状となり、僧侶の唱えるお経と自ら唱える念仏にそって数回同じ場所をグルグルと巡り、その後、遺影や遺骨を携えた親族を先頭に長い一列の隊列でもって納骨される墓域へと歩みを進めることとなる。

この“輪の儀礼”は、死者を取り巻く近親者たちによって編成されて執り行われる儀礼であり、ひとりひとりが白布で連結された円陣は、その内部に空間の領域をつくりだすこととなる。近親者によって意識的につくられたこの内部空間は、ある意味で結界と同義の意味をもつものとも解釈することができ、広義に解釈すれば現世と区画された異界への接点としての神聖な領域とみることができる。いわゆる僧侶や近親者が一体となって唱える念仏によって死者の御霊を鎮魂や浄化させることで成仏させ、現世から異界に送りだすための空間領域であるともとれる。この意味からすれば“輪の儀礼”は、葬送儀礼の中でも重要な儀礼のひとつとして受け取れる儀式であり、生きる者と死者との関係からすると、これら両者の最終的な離別のための儀式として執り行われる儀礼形態と言えるのではないだろうか。

3．輪の理念と類例

“輪の儀礼”は、上述した葬送儀礼だけにみられる所作ではなく、他にも種々の面でみられる類例をもつ。全国的に共通した祭事として、盂蘭盆会を中心とした時期に老若男女によって屋外で踊られる踊り、いわゆる盆踊りであるが、これもやはり輪という円陣を組んで踊られる民俗行事のひとつで、一年に一度死者の霊が現世に戻り供養を受けるという盂蘭盆会にともなって発展してきたものである。現在では残念ながら数例を残してほとんどが宗教的な意味合いが薄れ、地区共同体娯楽行事としての意味合いが強くなって行われている。死者供養儀礼として現在も行われている円陣を組み踊られる盆踊りに西馬音内盆踊り（秋田県羽後町西馬音内）がある。この盆踊りは旧来からの儀礼を受け継ぎ現在に継承されているもので、亡者踊りとも呼ばれる。鉦や笛・太鼓などの囃しのほか、独特な音頭のもとで、亡者を連想させる異様な黒覆面（ひこさ頭巾）を被った者と端縫衣装に身を包み、編み笠を被った姿の両者が入り混じって円陣を組み幻想的に、また、妖艶に踊られる。輪の内側は空間領域となっており、鑑賞者など一般参加者は立ち入ることが許されない空間とされ、中央数か所に火が焚かれており、一層異様な雰囲気をかもしだしている。中央に燃やされる火は、旧来は死者及び亡者の依代的な存在であり、迎え火であり送り火的な要素が加味されたものとみることができ、さらに踊り手は、現世の者と異界の者（亡者・死者）の二様と解釈される。この両者が共に念仏踊りを踊り狂うことによって亡者はしだいに鎮魂されて浄化され、しいては供養につながるものとしての死者供養儀礼の意味合いをもつ念仏供養踊りとみることができる。この盆踊りも上述した葬送儀礼にみられる輪の儀礼に類似する一要因をもつものと解釈される。

このほか、輪の儀礼としては、念仏剣舞の一種ともされ、“阿修羅踊り”とか“亡者踊り”とか呼ばれて伝承されている「鬼剣舞」もまた、演目の中に輪踊りを組み入れている。これもまた死者供養踊りとされる芸能であり、前述した葬送儀礼の輪と盆供養踊りの輪の意味合いと同義の意味合いをもつ輪であると考える。また、現代版としては、キャンプでのキャンプファイヤーの円陣も同義の意味合いをもつものであり、中央に焚かれる火は山の神の依代である。さらに死者供養とは性格を異にするが、茅（ちがや）を束ねて大きな輪とした「茅（ち）の輪」。6月30日の夏越しの祓の際に作られ、これをくぐると罪や穢れが祓われるとされる。いわゆる輪は、空間領域を形成することで、現世とを区画し、神聖な場所、神仏が依代とする空間であると考えられる。輪を伴う伝統的な民俗行事や芸能さらには宗教行事において輪の理念は重要な意味をもつものであることが理解できよう。

鬼の里だより

● 企画展・特別展

＜特別展＞平成18年度収蔵資料展「世界の鬼面」
～国々の信仰と仮面文化～
平成18年３月４日（日）～４月15日（日）
入込客数　1,751人

＜特別展＞開放事業①「眠りから醒めた文物展」
～縄文から近世へ～
４月28日（土）～７月８日（日）
入込客数　6,453人

＜企画展＞企画展21「岩手の権現さま」
～崇められた権現さまたち～
７月21日（土）～９月23日（日）
入込客数　6,033人

● 鬼の館芸能公演

４月22日	岩崎鬼剣舞	鑑賞者	107人
５月４日	三舘鬼剣舞	鑑賞者	193人
５月27日	二子鬼剣舞	鑑賞者	226人
６月24日	飯豊鬼剣舞	鑑賞者	146人
７月８日	鬼柳鬼剣舞め組	鑑賞者	86人
７月22日	口内鬼剣舞	鑑賞者	92人
８月14日	岩崎鬼剣舞	鑑賞者	167人
８月26日	鬼柳鬼剣舞	鑑賞者	153人
９月23日	北藤根鬼剣舞	鑑賞者	125人

● 大乗神楽大会

７月15日（日）　鑑賞者　197人

● 鬼学講座

第１回　６月30日「死者へのまつり儀礼」
鬼の館館長　力丸光雄　受講者　37人

第２回　７月21日「死後の世界と供養儀礼」
真言宗自性院住職　斎藤善昭氏
受講者　41人

第３回　８月17日～８月18日
移動研修「西馬音内盆供養踊り　見物」
参加者　24人

第４回　９月15日「生者の入信儀礼の意義」
盛岡大学名誉教授　門屋光昭氏
受講者　27人

● 鬼っこわんぱく講座

こどもの日わくわくイベント
５／５　参加者　363人

鬼っこ合宿「ボクら鬼っこ探検隊
～ミステリーツアーinみちのく民俗村」
８／１（水）～３（金）　参加者　27人

● 鬼ッズ・プレイミュージアム

４月１日～９月30日

和紙面づくり　参加者　224人

出前講座　参加者　61人

＜七夕ワークショップ＞
おりひめひこぼしキラキラモビールづくり
参加者　58人

＜夏休みワークショップ＞
魔除けすだれづくり　参加者　37人
鬼剣舞面づくり　参加者　42人
妖怪うちわづくり　参加者　36人

利用案内

開館時間　午前９時から午後５時まで。
なお、入館は午後４時30分まで。

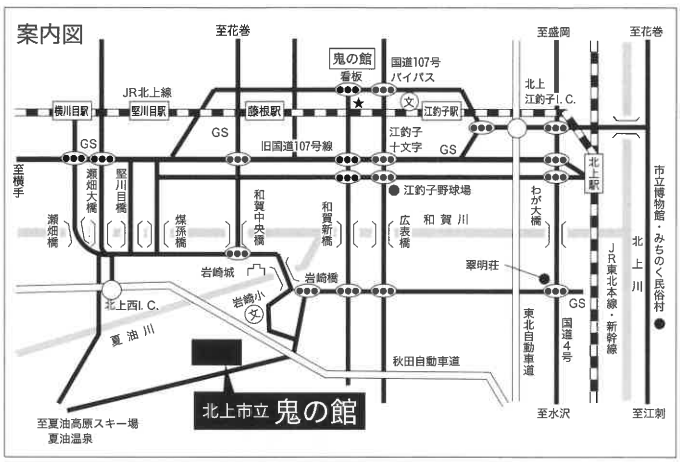
休館日
・12月～３月の月曜日
・12月～３月の国民の祝日の翌日
（土・日・月曜日の場合は火曜日）
・館内整理日（11月27日～12月１日）
・年末年始　（12月28日～１月４日）
・臨時休館日（5/22・8/28・11/20）

入館料

一　般	300円（250円）
高校生	200円（150円）
小中学生	150円（100円）

（　）内は20人以上の団体料金。
下記の場合、市内小中学生は入館料が免除になります。
・毎週土・日曜日
・学習活動で申請利用する時

交通案内
・ＪＲ北上駅西口よりバスで25分。
煤孫経由横川目行、瀬美温泉行「岩崎橋」下車徒歩10分。
・JR北上駅より車で20分。
・東北自動車道「北上江釣子I.C.」、秋田自動車道「北上西I.C.」よりともに車で15分。



北上市立鬼の館だより
第　27　号　2007.9.30
編集・発行　北上市立鬼の館
〒024-0321　北上市和賀町岩崎16地割131番地
TEL 0197(73)8488　FAX 0197(73)8508